イエスの昇天

ルカ福音書24:50-53
（新改訳2017訳）

24:50 それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。
24:51 そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた。
24:52 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、
24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

【祈りながら考えよう】

（１）主イエスが昇天なさる時に弟子たちに命じられた３つの命令は何ですか。
（２）弟子たちにとって、復活の主が語る神の国は、十字架以前に語られた神の国とはどう違いますか。
（３）イエスが昇天された後に、御使いたちは弟子たちに何を予告されましたか。

【解　説】

（１）復活の主が近づいてきて

イエスが昇天なされた場所はどこかと言うと、ここではベタニア（オリーブ山の東側）の近くということであるが、マタイ福音書を見ると、それが山であることがわかる。マタイ28章16-18節、

《さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示された山に登った。そしてイエスに会って礼拝した。ただし、疑う者たちもいた。イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。

これが、イエスが弟子たちと別れて天に上られるその時の言葉とされている。その場所は《山》とある。この山は定冠詞があって、かねてよく知られている山であることがわかる。そこで弟子たちは復活のキリストに最後にお目にかかった。この山から、イエスは弟子たちと別れて昇天された。

《そしてイエスに会って礼拝した》　礼拝した。イエスはもはや単なる人ではない。神である。神であることが弟子たちにはっきり分かった。イエスが復活されたその復活がはっきり分かったからである。

《ただし、疑う者たちもいた。イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた》

なお弟子たちの中に疑う者もいた、とマタイは記している。イエスの復活ということは、人間の常識や経験や知識、人間の信仰では分からない。十二弟子のトマスは疑っていた。しかしイエスの方から近づいてきて、トマスの疑いを取り除かれた。トマスの方から疑いをはらしたのではない。イエスの方がトマスに近づいて、脇の傷を見せ、手を見せて、トマスを導き、ついにトマスの目を開き、「私の主、私の神よ」と叫ばせた。疑った者が、かつて弟子たちが言わなかったイエスのことを、「私の主、私の神よ」と、最初に呼ぶ者となった。

（２）イエスの3つの命令

《わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます》（マタイ28:18-20）

今天に昇ろうとされる復活のキリストが、弟子たちに命令された。

第1は、すべての国民を弟子とすること。キリストの出来事は、単にユダヤ人だけの出来事ではない。ある民族、ある階級の人々だけの出来事ではない。全世界の出来事。弟子とするとは、信者にすること。その意味において、キリストを信じる者はみんなキリストの弟子となることである。

第2は、父と子と聖霊の名の中に、彼らをバプテスマする（浸す）こと。単なる儀式を行うことではない。「父、子、聖霊の名において」の「名において」はギリシャ語原文の前置詞はエイス（εἰς）であり、「名の中に」とも訳せる。

キリスト者のバプテスマは、「神は私の父なる神。イエス・キリストは私の主、救い主。聖霊は私のうちに住み、私を教え、私に力を与えるお方」との信仰を公に表明することである。

19節の《名/name》は単数形である。よって、この節から、「父、子、聖霊」は、三人の神ではなく、三位一体の神であることがわかる。ですから、弟子となった者たちは三位一体の神との交わりに入れられることである。

第3は、あなたがたに命じておいた一切のことを守るように教えなさいということ。この宣教命令は福音伝道だけにとどまるものではない。人を回心に導いただけで、あとは自分自身で成長させる、というのでは十分ではない。新約聖書にあるキリストの命令を守るように彼らに教えなければならない。弟子であるということは、本質的には、主人であるお方のようになるということである。つまり、御言葉を計画的に、順序立って体系的に学び、その御言葉に従うことによって真の弟子となることができるのである。

（３）福音は全世界に伝えられて

《見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます》（マタイ28:20）

救い主は、《世の終わりまで》弟子たちとともにいるという約束をお与えになった。弟子たちがひとりぼっちで遣わされたり、助けのない状態で送り出されたりはしなかった。どんな旅においても、どんな働きにおいても、彼らは神の御子がともにおられるのを知るのである。これはマルコ福音書16章19-20節にもある、

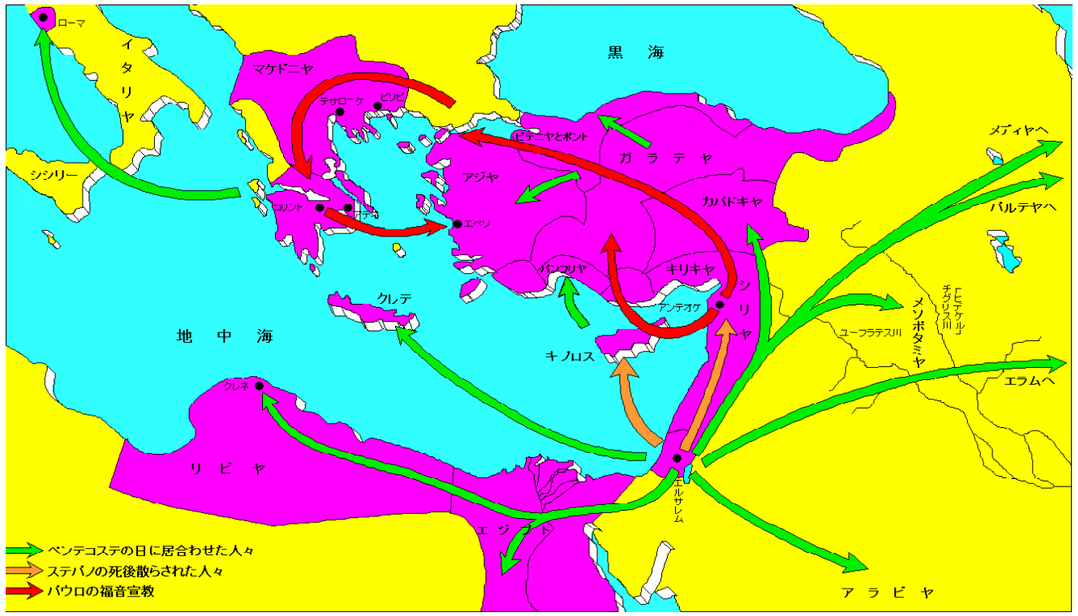
《主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた》

福音が宣べ伝えられていく所、そこに必ず生ける主は彼らと共に働かれる。見える所は、ペテロやヨハネが働いている。しかし、彼らを動かす原動力は彼らではない。彼らを動かしているのは、主イエス・キリストである。

ペンテコステの日から爆発的な伝道が始まった。特に、パウロの３回に及ぶ伝道旅行の成果は大きく、地中海沿岸からローマへ至る地域の伝道が行われた。しかし、地中海地域へのキリスト教の拡大と共に、弾圧も強まっていった。

ローマ皇帝ネロ（在位：AD56-68年）は、キリスト者を迫害した暴君として知られ、悪名が高い。彼は、紀元64年にローマで起きた大きな火事の原因では、「ネロは新しく都を造るために放火した」という噂が流れた。その風評をもみ消そうとしたのか、ネロ帝はローマ市内のキリスト教徒を大火の犯人として反ローマと放火の罪で処刑した。この中には、パウロも含まれており、65年に殉教したと伝えられている。

この時から、ローマ帝国による長いキリスト教迫害の歴史が始まった。しかし、主イエスが言われた通り、福音は全世界に宣べ伝えられ、二千年の歴史は、主の御言葉の真理を証明している。



爆発する伝道

（４）復活の主が語る神の国

ルカ福音書の第二部作である使徒の働きの最初に、このことがさらに具体的に記されている。使徒１章１節から、

《テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた》（使徒1:1-3）

ここで、イエスが復活されてから、40日間この地上におられたことがはっきりする。この40日間、イエスが復活の体をもって地上におられたのは何のためであるかということも、ここではっきり言われている。

第1は、《数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された》

ご自分の体が復活したという最も有力な証拠を示された。復活の事実をわからせるため、40日間とどまられた。

第2は、《四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた》

ただ自分が復活したということを見せるためだけではなく、その現れるたびごとに、神の国のことを語られるためであった。かつて弟子たちは、肉のイエスから神の国のことを聞かされた。しかしその時は、自分たちの主観でこれを受け取り、自分たちの解釈で解釈していた。

彼らはイエスの肉の姿において語られる神の国のことを聞いていたから、どうしても神の国は、地上で、この肉の体で受け継ぐ神の国しか彼らには考えられなかった。だからそのイエス様が十字架にかかって死んでしまった時には、彼らの望みは全く破れ果ててしまったわけである。

しかし今彼らが聞く神の国は、同じことをイエスは語られているが、十字架の死、肉体の死を越え、これに打ち勝って復活した、復活のキリストによって語られる神の国である。そこで受け取られる神の国は、十字架で破れ果ててしまうような神の国ではない。その十字架の死の向こうにこそ、永遠の命において実現する神の国、それがこの復活のキリストにおいて語られていた。弟子たちには今度はよくわかった。ここは大切な所である。

（５）イエスの約束と命令

第3には、《使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた》（使徒1:4）

弟子たちに1つのことを命じられた。これはマタイ福音書にも言われている命令と同じである。

《エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです》（使徒1:4-5）

まずイエスが命じられることは、いと高き所からの力、すなわち聖霊によって新たなる力を受けるまで、エルサレムにとどまっていなさいということである。そしてその力を受けた時どうなるか。

《しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります》（使徒1:8）

キリスト者の証しに必要不可欠なものは聖霊の力である。ある人はすぐれた才能を持ち、訓練を受け、様々な経験を持っているかもしれないが、霊的な力がなければその人は無力である。おびえる弟子たちには、証しする力、福音を語るための聖い大胆さが必要であった。聖霊が臨んだ時、彼らはその力を受けた。

（６）まず聖霊を受けて

《聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土》

キリストを信じる者は、まず十字架に出会う。そして復活に出会う。さらに聖霊に出会う。そして聖霊の力を受ける。水のバプテスマは受けたが、聖霊のバプテスマを受けるところまでいっていないなら、まだ力は発揮されない。

私たちの目指す神の国は地上ではない。血肉は神の国を継ぐことはできない。この血肉は死ぬべきもの。所詮この世界は滅びるしかない。神の国は、神のみもとから新しく来るもの。私たちはこれを待ち望む。そしてこの神の国を待ち望む者の仲間の1人でも増やしていくことが、私たちのこの地上における働きである。

十字架で流されたあの血潮の出来事が1つも無駄にならないように、すべての人に伝えられていかなければならない。

（７）神の国は御霊によってのみわかる

《こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった》（使徒1:9）

弟子たちの見ているその面前で、イエスは昇天された。

イエスが昇天された天は、宇宙船が月へ飛んで行った、あるいは他の天体へ飛んで行く、あの空間としての天、そういうことを意味しない。霊の次元、霊の世界、神のみもとである。

宇宙間のどこかに天国がある、あるいは神がおられる、そこにイエスが上られた、そういう物質的な天を考えるのではない。

人間の感覚で、物質的な天、空間的な天を考えてこの事を思うと、何日ぐらいかかってイエスは神様のもとへ昇られたろうか。空気がなくなった時、イエスはどうなるだろうか、そういうふうに考える。どこまでも、神の国を血肉の世界で実現しようとする。そこに間違った神の国観が生まれてくる。

神の国は、血肉の世界ではない。御霊の助け・諭しによって、霊の次元、霊界のことであることが理解できる。

（８）キリスト再臨の予告

イエスが昇天されて、そこで終わったのではない。それからが大切な所である。

《イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」》（使徒1:10-11）

イエスは天にお帰りになった、それで事は終わったのではない。これから新しい事が起こる。それはキリストの再臨である。キリストの再臨がどういう形で実現するか、それをこの言葉ではっきりされている。

イエスが最初においでになったのは、ひそかなる現れ方であった。あの貧しいナザレのおとめマリアに示され、そしてそのマリアの胎を通って、家畜小屋の中で降誕された。ひそかな出来事であった。

しかし今度、キリストが再臨される時には、そうではない。神の子の権威をもって現れる。全世界、信じる者も信じない者も、すべての者が目を見張ってこれを迎えなければならない。見える姿において、主は来られる。

（９）御言葉の約束に立つ祈り

《そこで、使徒たちはオリーブという山からエルサレムに帰った》（使徒1:12）

ここで、あのマタイ福音書にあった《イエスが指示された山》（マタイ28:16）がオリーブ山だということがわかる。エルサレムの東、谷を隔てた向こう側にある山である。彼らはエルサレムに帰った。そして何をしたのか。

《この山はエルサレムに近く、安息日に歩くことが許される道のりのところにあった。彼らは町に入ると、泊まっている屋上の部屋に上がった。この人たちは、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党員シモンとヤコブの子ユダであった。彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。そのころ、百二十人ほどの人々が一つになって集まっていたが》（使徒1:12-15）

イエスの昇天の後、エルサレムのある家で、これはイエスが弟子たちと最後の晩餐をされた家（伝説によるとマルコの母親の家）。

ここが聖霊降臨の場所となり、キリスト教二千年の教会の歴史の出発点となった、その屋上の部屋で、百二十人ほどの人々が1つになって祈っていた。

何の祈りか。イエスが約束された、いと高き所からの力を着せられるために祈っていた。心を1つにして祈っていた。聖霊を祈り求めていた。そして十日の日が過ぎた。

神の聖霊の力が注がれるのは、私たちが神の御前で待っている時である。神を信じて、心を1つにして祈らなければならない。そうすれば、聖霊による力が与えられ、奮い立たされ、励まされる。

（10）主の祝福の御手を見つめて

《それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた》

手を天に上げて弟子たちを祝福された。イエスの手の中に全宇宙、全天が握られている。今日もイエスはこの手を上げて、私たちを、すべての群れを祝福しておられる。私たちはこのイエスの手を見つめて、この手から与えられるものを豊かに受けながら、どんな事態に直面しても、それに打ち勝って前進させられる。

（11）御言葉と聖霊に委ねて

2015年11月29日から始まったルカ福音書の学びは、今日をもって終わる。二年八ヶ月、御霊は私たちを愛し導いて下さった。ルカ福音書において多くを学び、力づけられた。

次回からは、ヨハネ福音書を学んでいきたいと願っている。何年かかるか。途中でこの地上の生を終わって去ることになるか。あるいは無事読み終わって、さらに次の書の学びにいくことができるか。明日のことはわからない。

《彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた》

私たちのこれからの歩みが、聖霊の宮にあって、主にある兄弟姉妹との交わりの中にあって、日々、喜びに満たされ、神をほめたたえ、神の栄光の中におかれていく、そういう歩みを続けて行きたいと願う。

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

マタイ 28:19

πορευθέντες οὖν μαθητεύσατε πάντα τὰ ἔθνη, βαπτίζοντες αὐτοὺς εἰς τὸ ὄνομα τοῦ πατρὸς καὶ τοῦ υἱοῦ καὶ τοῦ ἁγίου πνεύματος,

<文法解析ノート> マタイ 28:19

[1] πορεύομαι **πορευθέντες** vraonm2p 動)命アオ能欠2複 行く
[2] οὖν **οὖν** ch 接)完等 それで [3] μαθητεύω **μαθητεύσατε** vmaa--2p 動)命アオ能2複 弟子となる
[4] πᾶς **πάντα** a--an-p 形)対 全部で、すべての、どんな～でも、あらゆる、あらんかぎりの、1つも欠けが無い
[5] ὁ **τὰ** danp 冠)対中複 冠詞(この、その) [6] ἔθνος **ἔθνη,** n-an-p 名)対中複 国民、異邦人
[7] βαπτίζω **βαπτίζοντες** vrpanm2p 動)命現能2複 バプテスマを授ける
[8] αὐτός **αὐτοὺς** npam3p 代)対男3 彼･それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
[9] εἰς **εἰς**（エイス） pa 前)対 ～へ、まで、のために、に対して [10] ὁ **τὸ** dans 冠)対中単 冠詞(この、その)
[11] ὄνομα **ὄνομα**（オノマ） n-an-s 名)対中単 名 [12] ὁ **τοῦ** dgms 冠)属男単 冠詞(この、その)
[13] πατήρ **πατρὸς** n-gm-s 名)属男単 父 [14] καί **καὶ** cc 接)等 そして、～さえ、しかし、しかも、それでは、そうすれば
[15] ὁ **τοῦ** dgms 冠)属男単 冠詞(この、その) [16] υἱός **υἱοῦ** n-gm-s 名)属男 息子、子、子孫
[17] καί **καὶ** cc 接)等 そして、～さえ、しかし、しかも、それでは、そうすれば
[18] ὁ **τοῦ** dgns 冠)属中単 冠詞(この、その) [19] ἅγιος **ἁγίου** a--gn-s 形)属中単 聖い、聖なる
[20] πνεῦμα **πνεύματος,** n-gn-s 名)属中単 霊

<聖書翻訳比較ノート>

【新改訳2017】ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、

【新改訳改訂3】それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、

【口語訳】それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、

【新共同訳】だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、

【LIB改訂】 だから、出て行って、すべての人々をわたしの弟子とし、彼らに、父と子と聖霊との名によってバプテスマ（洗礼）を授けなさい。

【NKJV】 "Go therefore and make disciples of all the nations, baptizing them in the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit,

【TEV】 Go, then, to all peoples everywhere and make them my disciples: baptize them in the name of the Father, the Son, and the Holy Spirit,

【KJV】 Go ye therefore, and teach all nations, baptizing them in the name of the Father, and of the Son, and of the Holy Ghost:

【NIV】 Therefore go and make disciples of all nations, baptizing them in {Or <into>; see Acts 8:16; 19:5; Romans 6:3; 1 Cor. 1:13; 10:2 and Gal. 3:27.} the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit,

{} 内の参照聖句にはいずれも前置詞 εἰς（エイス）が使われています。

{前置詞 εἰς が使われている参照聖句}

使 8:16 彼らは主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだ、彼らのうちのだれにも下っていなかったからであった。

使 19:5 これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。

ロマ 6:3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。

Ⅰコリ 1:13 キリストが分割されたのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか。

Ⅰコリ 10:2 そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、

ガラ 3:27 キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。